Osaka University Knowledge Archive

Title	オリンピック日本選手団公式服装赤白上下の周辺
Author(s)	安城, 寿子
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 106-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56391
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

オリンピック日本選手団公式服装赤白上下の周辺

安城寿子／服飾史家

0．はじめに

オリンピックの入場行進に臨む日本選手団の服装がどのような変遷をたどってきたかということは，それだけで人々の関心を惹くテーマであるが，日本オリンピック委員会（以下 JOC と略記）の刊行物の中にも，その歴史を明らかにしたものはなく，とりわけ，1964年の東京オリンピックにおける公式服装については誤情報が多い。本発表では，こうした未着手の課題への取り組みとして，いくつかの報告を行った。

1．事実関係 ── 誰が東京オリンピックの公式服装をデザインしたのか ──

JOC の公式記録によれば，東京オリンピックにおける日本選手団の公式服装は，1964年７月８日の服装小委員会で最終決定され，日の丸に着想を得た「上赤，下白」の色使い，素材はマットウーステッドで，男子はセンターベンツのブレザー，女子はベンツなしのブレザーにアコーディオンプリーツのスカートというものであった。デザイナーに関する記述は皆無で，「（依頼先）大同毛織（加工ジャパン・スポーツウェアクラブ）」とだけある。

この時の公式服装をデザインしたのは VAN 創業者の石津謙介であるというのが通説だが，今回，株式会社ダイドーリミテッド（旧大同毛織）所蔵資料をはじめとする同時代資料の調査により，実際そのデザインを手がけたのは，東京神田で日照堂という洋服店を営んでいたテイラーの望月靖之であることが明らかになった。先のジャパン・スポーツウェア・クラブとは，望月を代表とするテイラーの集まりで，「ナショナル・カラーの表現」ということに強い思い入れのあった望月の提案が JOC に受け入れられ，生地の生産を大同毛織が，仕立てをジャパン・スポーツウェア・クラブ加盟のテイラーたちが請け負ったというのが正確な事実関係である。

図１．図２右下に置かれたプレートの拡大

さらに，ダイドーリミテッド所蔵の多くの写真からは，東京オリンピックの開催とともに，全国の百貨店のショーウィンドーにこのブレザーが飾られていたということが明らかになった。すなわち，東京オリンピックというイベントは，ショーウィンドーという「メディア」を通じても体験され，そこにおいて，日本選手団の公式服装はこのイベントのシンボルの一つになっていたということである。

図２．丸栄百貨店（名古屋）のショーウィンドー

ちなみに，前出の石津は，この時，桑沢洋子や芦田淳とともに，通訳や場内整理員といったスタッフの制服のデザインに携わっており，こちらはサイズ展開のある既製服だった。

2．オリンピック日本代表選手団公式服装小史 ── 望月靖之の奮闘の意義 ──

意外に知られていないことだが，東京オリンピック以来，1988年のソウル大会まで，「JOC が派遣する選手団の公式服装は」「上は赤，下は白とする」旨が JOC の申しわせ事項として決められていた。

それ以前はどうであったかという歴史を探ることは，そのまま，前出の望月が東京オリンピックに至る過程で繰り広げた奮闘について知ることでもある。望月は，日本選手団にとっては戦後初の参加となった1952年のヘルシンキ大会において，既に，公式服装のデザインを手がけているが，その時，秩父宮雍仁親王から「日本代表選手の服装にふさわしいナショナルカラーを作りなさい」との激励を賜り，これを契機に，公式服装における「ナショナル・カラーの表現」へと情熱を傾けていった。そうして，「我が日の本の国は」という歌舞伎の台詞などから着想を得，「日の丸」の赤と白こそが日本の「ナショナル・カラー」であるとの考えに至るも，彼の提案は，メルボルン大会（1956年）とローマ大会（1960年）の二度とも JOC の理解を得られず，ようやく，1964年の東京オリンピックに至って受け入れられたのである。以上の経緯を踏まえるなら，東京オリンピックの公式服装は，望月の悲願の達成であったと言えるだろう。

先にも触れた通り，その後，1988年のソウル大会まで，JOC の申し合わせ事項として，日本選手団の公式服装は赤白二色の「ナショナル・カラー」でなければならないということが決められていた。さらに，デザインの刷新をめぐる議論とともにこの申し合わせが撤廃された後も，森英恵が手がけたバルセロナ大会（1992年）やアトランタ大会（1996年）の公式服装は「日の丸」をイメージしてデザインされており，してみると，望月の奮闘は，日本選手団の公式服装と「日の丸」というものを結び付けた最初の試みとして意義深いものであったと言える。

3．同時代における一つの対立 ──「石津デザイン説」は何故受け入れられるか ──

1964年６月７日付の『読売新聞』は，「貧乏人の注文服」と題し，東京オリンピックの公式服装を酷評する石津謙介の文章を掲載している。石津は，当時の「アイビー・ブーム」を牽引した既製紳士服ブランド，VAN の創業者だが，彼の批判は，公式服装が既製服でなく注文服であるというただ一点に向けられていた。こうした批判を受け，今度は，『日繊ジャーナル』に反論の記事が掲載されたが，そこでは，日本の既製服が未だ粗悪品にとどまるものでしかないということが強調されている。すなわち，それは，既製服と注文服をめぐる対立であった。

以上の事実は，先述の「石津デザイン説」が誤りであるということを補強するだけでなく，衣生活の中心が注文服から既製服へと移行しつつあった日本服飾の1960年代的状況をよく物語っている。そして，「石津デザイン説」が広く受け入れられる理由の一つもまた，この辺りに求められるのではないだろうか。周知の通り，1970年代には，既製服が注文服の市場を圧迫するようになるが，VAN の台頭は，そうした趨勢を先駆ける動きにほかならなかった。その VAN の創業者である石津が東京オリンピックの公式服装をも手がけたという物語性によって，おそらく，「石津デザイン説」は広く受け入れられてきたのだろう。